

きべりはむし 50 周年と兵庫昆虫同好会 50 年の活動終了について

近藤伸一¹⁾

“きべりはむし”が発行されて50年が経ちました。兵庫昆虫同好会の皆さま、NPO法人こどもとむしの会の皆さま、また日ごろから指導ご支援をいただいている多くの皆さまにお礼申し上げます。来年度から兵庫昆虫同好会の活動を終了させていただき、“きべりはむし”の発行はこどもとむしの会単独で行います。今後も変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

50年という節目の年にあたる今回、これまでの“きべりはむし”の歴史について紹介します。

高橋寿郎氏と歩んだ“きべりはむし”

1972年、高橋寿郎氏が兵庫農大の学生であった辻啓介氏より昆虫同好会結成の協力要請を受け、“きべりはむし”はスタートしました。当初は辻啓介氏が編集者、高橋寿郎氏が世話人であったが、1978年に辻氏が渡米。6巻以降は高橋氏がお一人で、年2回の編集、発行を担われました。1994年22巻2号までに甲虫を中心に146編を掲載し、兵庫県内の昆虫相の解明が一気に進みました。

一方、会誌運営の重荷が高橋氏一人の肩にかかってしまい、会費収入では印刷費、発送費が賄えず、発行のたびに赤字が累積し、加えて原稿が十分に集まらないという状況が続いたことから、“きべりはむし”の休刊の決断を余儀なくされました。大変苦勞された様子がうかがえます（きべりはむし25年の歩み：高橋1998）。

1994年、たまたま原稿の相談で高橋氏に電話したとき、休刊するという言葉を聞き、驚いて高橋氏のご自宅に高島昭氏とうかがいました。話し合いの結果、会誌は発行を続けるが、運営に関する一切を近藤、高島が引き継ぐということで、休刊は思いとどまることとなりました。しかし翌年の1995年1月の阪神淡路大震災により、高橋氏のご自宅は半壊、標本類や蔵書に多大な被害をうけられました。その時にも、再び休刊の相談を受けましたが、高橋氏には執筆だけに専念していただくこと

で、“きべりはむし”は継続することとなりました。

その後の高橋氏の執筆速度はものすごく、1995～99年の5年間で矢継ぎ早に44篇、3回の特別号増刊を含めて実に500ページ分の原稿を執筆され、“きべりはむし”が充実の5か年を終えようとした矢先の1999年12月4日に帰らぬ人となられました。高橋氏念願の「日本に産するコガネムシ類の分類目録」27巻3号（特別号）が脱稿された直後でもありました。

遺品整理のために高橋氏宅を訪れた際、私は初めて高橋氏の書斎に入れていただきました。地震被害の影響が残り、2階のすべてのふすまは取り払われ、床一面に高さ80センチほどに積み重ねた書籍の山が並び、机の上は書きかけの原稿と大量の完成原稿が残されていました。愛用の机、窓際の顕微鏡、ストーブ以外の家具らしきものはすべて排除されていました。遺稿は、兵庫県の甲虫に関する資料として大変貴重なものであったため、高橋寿郎遺作集No.1～10として兵庫昆虫同好会事務局が編集し、28巻1号（2000年5月）から29巻1号（2001年5月）にかけて掲載することとなりました。なお、高橋氏の原稿はすべてが手書きのため、高島昭氏にはパソコン入力に大変なご苦勞をおかけしました。

NPO法人こどもとむしの会と“きべりはむし”

2008年9月26日、竹田真木生、八木剛両氏が中心となってNPO法人こどもとむしの会が設立され、内藤親彦理事長のもとで活動が開始されました。この時、兵庫昆虫同好会の会員の多くがこどもとむしの会に入会しました。“きべりはむし”は2009年4月の32巻1号（佐用町昆虫館開館記念号）からA版に変更、兵庫昆虫同好会とこどもとむしの会の合同出版（きべりはむし編集委員会）となり、事務局は神戸大学農学部昆虫科学研究室に変更となりました。

2009年8月には台風9号の影響で、佐用町を中心とした記録的な大災害が発生。昆虫館が位置する船越地区も大きな被害をうけ、昆虫館は窓まで土砂に埋まりました。こどもとむしの会が発足してすぐの困難ではあり

¹⁾ Shinichi KONDO 兵庫県朝来市

ましたが、会員と多くの支援者の方々の懸命の努力で、昆虫館を復活させることができました。

2010年33巻1号から新たな編集事務局長 中峰空氏のもとでスタートを切り、表紙は現在のサネカズラにキベリハムシの家紋となりました。また、32巻2号からオンラインジャーナルのPDF版が正式版となり、ISSN（国際標準逐次刊行物番号）を取得されました。

2021年44巻1号から若手の池田大編集委員長で現在に至っています。